

\*\*\*\*\*

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第118号

-原田勉から引継いだ環境・農業・食べ物など情報の交流誌-

2003.09.25 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<新キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の  
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_index.htm](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm)

\*\*\*\*\*発行部数 1686 部\*\*\*\*\*

---

□ 目次 □-----

<今週の提言> 棚田を生かした「むらづくり」 安富六郎

<読者の声> 丹羽さんから：赤堀さんから：小泉さんから

<舌耕のネタ> コメ泥棒の正体は？ 原田 勉

<山崎農業研究所情報>

◇『21世紀水危機—農からの発想』を読む(その2) 田口 均

<元気な農業・元気なくらし・6>

いま「食育」で大切なことは？(上) 農文協・栗田庄一

<丹羽敏明の戦争体験> 18、演芸部の誕生の基礎

<日本たまご事情>

「男はタマゴを毎日2ヶ食べると心筋梗塞で死なない？」

愛鶏園・齋藤富士雄

<中学生に環境問題をどう教えるか?・2> 環境クラブ・増山博康

<農文協図書館情報> 農文協図書館・原田太郎

<編集同人の近況報告> 9月11日~9月24日

---

<今週の提言> 棚田を生かした「むらづくり」

---

棚田は地域の風土を表わした構造物であり、周囲の自然と一体となっている。地殻の変動、侵食および地盤の滑動などがさまざまな形の棚田を、そして農村の景色をつくってきた。整備されていない水田を見ると、このことがよく分かる。

山形県の月山近くに田麦俣というところがある。この近辺には地滑り地帯があるが、棚田は1枚1枚の形が個性的で、地面の躍動(ダイナミズム)を感じさせる。

千葉県や茨城県にある谷津田は、小さな田んぼが地形に合わせてつながっている。水は台地の雑木林にたよっている。ここには貝塚などの多くの遺跡があるが、水田との関係は興味深い。

松本市郊外にある梓川の河川沿いに発達する棚田は階段状で、谷津田とは異なった様相を見せる。

このように、棚田や農村の景観はさまざまな自然環境を物語っている。しかし、国の基準化された大型圃場整備によって、景色すらも規格化されてしまった。

中山間地域には水害が多い。島根県弥栄村では、かなり急な傾斜にも水田が開かれている。上位の放棄水田が決壊し、水勢は次々と増幅され、下流に大きな水害をもたらした。

棚田も放棄されないような圃場整備が必要であり、かつそれは、地形、地質および地域の歴史に見合ったものがよい。景観がよく、しかも造成費の安い整備が望まれる。

圃場の整備を県や国に頼らずに独自の構想で進めている村がある。長野県の栄村では、農業生産者の願望から地域にあった圃場の整備が実施された。地域に相応しい整備が作業条件の向上と農村の活気にプラスすることを見せてくれる。今後の棚田整備に参考になる。

町村合併や圃場整備の設計基準などにより、地域の特性が失われ、生産性の低い田圃は切り捨てられるかもしれない。棚田には歴史があり農村の文化が宿っている。これを生かした、手作りの「むらづくり」と自然環境を守ることが望まれる。規格化時代に棚田を通して、里山、中山間地の在り方をいま一度考えてみたいものである。

安富六郎

山崎農業研究所会員、土地利用学

y.noken@taiyo-c.co.jp

農村環境整備センター：日本の棚田百選

<http://www.acres.or.jp/Acres/Index.html>

長野県栄村

<http://www.janis.or.jp/users/sakae/>

田渕俊雄著『世界の水田 日本の水田』（山崎農業研究所発行、農文協発売）

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_books.htm](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_books.htm)

---

<読者の声>

---

-----  
●9/12 丹羽敏明さんから：

117号の配信有り難うございました。山崎農研の『耕』の制作のお手伝いを一時させて頂いておりましたので、同研究所の編集同人の方々が中心となって『電子耕』の発行を継続されることを歓迎し期待しております。私には新しいキーワードの御趣旨に沿えるような内容のものをお送りすることはできませんが、従来通りよろしく願います。

今回から捕虜収容所に収容された隊員の心境をのべた短歌を抜粋して御紹介します。作者の名前は省略致します。

『あぶら灯のゆらぐ焰をみつめつつひたに家郷を恋ふ夕べかも』『灯心をかき立つるにも慣れにける天幕住まいがいつまでならむか』『六年ぶり母と語りし夢さめて暫くの間は虚脱にてあり』『内還の友に託せし言伝てを何と聞くらむ古里の母は』『比島にて兄散華せりと聞きつつも不甲斐に生きる吾はここに』『爆音に耳をすませる日もありき整備員なりし吾のかなしく』『雪深き越後の奥のわが里に無事をしらせる術もあらず』『特攻と決せし頃のわが眸いま輝かず暗くにごれる』『帰還論愚痴に変わりて遂にまた怒りとなれるあとの侘しさ』『まどろみて夢に浮かべるたらちねの面差しいたくやせていませり』『すきみたる心悲しも病得て還る友だちうらやみてあり』『故郷に父母の在して任重し他にはらからのなき身にあれば』『とぼとぼと雨の舗道を濡れ帰るつわものの姿今あわれなる』『配給の乾パン供え亡き戦友の新盆迎えてしみじみ語りぬ』『師走とも聞けば思ほゆ愛し子が炭火乏しく過ごし居る日を』『内還のニュース途絶えしこの日頃落ち着きて何か為さんと思えど』『みかどべに死すべき命永らえて呆け過ぎす身憤ろしも』

(つづく)

-----

●9/19 赤堀真琴さんから：

原田さん、

長い間、「電子耕」の運営ご苦労様でした。

今年、88歳の村上さんの米作り姿を紹介しはじめたところ  
でしたので、少々残念でした。

村上さんは相変わらず元気で、8月17日には網掛け作業に  
参加しました。今年の不順な天候の影響はこちらの稲にも  
ごく一部にありますが、全体的には昨年並だろうと思ってい  
ます。

稲の収穫までは村上さんの紹介を続けようと思っています  
ので、原田さんも無理をなさらず、お元気でお過ごし下さい。

村上さんの8月17日 網掛け作業

<http://nazuna.com/tom/pct/118-081700011s.jpg>

-----

●9/19 小泉浩郎さんから：

▼日本の農業は「小さく」「弱い」か

日本の農業は「小さく」「弱い」。だから、外国との競争に負けないため  
には規模拡大と法人化が必要だ。新聞報道等から判断すると、最近の農政の基調  
はそのようなものらしい。本当に日本の農業は「小さく」「弱い」か？ アメ  
リカの農業とと比較してみよう。

農家の数を日本は農家数、アメリカは農場数と呼ぶ。農場というといかにも  
大きく企業的経営に聞こえるが、その90%は個人経営か家族経営である。法人  
化している経営は、たったの4%にすぎない。一方1戸あたり耕地面積は、日  
本が、東京ドームのほぼグラウンドの大きさ（1.6ヘクタール）、これに対しア  
メリカは、その123倍（197.2ヘクタール）である。

ところが、この大面積をこなすアメリカ農業の販売額をみると、年間600万  
円（1ドル120円）未満が74%。経費を差引くと300万円を切るだろう。アメリ

かで勤労者並みの農業所得を得るには販売額3千万円以上が必要といわれる。そのような農場は全体の10%程度しかない。

以上はアメリカの農業センサスの公式な数字だ。なるほどアメリカ農業は、耕地面積は「大きい」が、大部分は家族経営であり、農業所得もけして高くない。「強い」といわれるアメリカ農業は、ごく一部の超大規模農場だけなのだ。

このことから次の2点がいえそうだ。

1つは、日本の農業は「小さく」「弱い」というのは、霞ヶ関や財界からの脅迫かもしれないということ。家族経営は、身体は小さいが、環境を巧みに活用し安定した生産や豊かな暮らしを可能とする。本当は家族経営こそ「強い」存在なのではないか。

だから、もう1つは、「小さく」「弱い」という脅しに乗り、家族経営を崩してしまったら、食べ物の生産はもとより緑豊かな環境まで失うことになるか。多分、ごく一部の金儲けだけの大規模農企業では、国土や農業・農村を将来に向けて守っていける保証はないのではないかと思う。

小泉浩郎

山崎農業研究所

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_index.htm](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm)

---

<舌耕のネタ> コメ泥棒の正体は？

---

茨城で千葉で……大量盗難相次ぐ「狙われるブレンド米」(9/13 毎日新聞)  
そのひとつ、茨城の農家の例では、コシヒカリ 30キロ袋 23個 (690キロ)、3日前に収穫したばかり、夜間に納屋から運びだしたらしい。「近所でさえ刈り取りをしたのを知らないのに、犯人はコメの栽培や、付近の事情にくわしいのでは」と農家の主婦は怒る。

この記事に、出来秋のコメ収穫シーズンを前に、またかと怒りがこみ上げた。これから全国各地に広がり「悪事千里を走る」にならねば良いかと念じている。

今年の夏に盗まれた農作物は高級品ばかり、有名ブランドのスイカ、メロン、サクランボ、ブドウ、ナシ、リンゴなど全国にわたっている。

生産者の苦労や愛着を踏みにじる許し難い悪事だ。この泥棒の正体は？  
『電子耕』の読者の皆さんは、どうお考えか？ お聞きしたい。

- 1、高価のものをどこで換金しているのか、闇ルートがあるのでは？
- 2、現地や流通の事情に詳しい者の犯行では？
- 3、不正・悪行を承知のうえという道徳（モラル）の欠如か？
- 4、政治、経済、社会、大企業にも悪徳不正が横行しているからか？
- 5、歴史上、幕藩体制の崩壊の幕末や軍事独裁政権敗戦の混乱期にも起きた事件とよく似ていると思われるがいかがなものか？

原田 勉

<http://nazuna.com/tom/>

---

<山崎農業研究所情報>

---

◇『21世紀水危機—農からの発想』を読む（その2）

——水輸入大国日本—危機に立つ食料＝水主権／松坂 正次郎

食をめぐる最近のキーワードのひとつに「安全・安心」がある。

松坂さんは、「この『安全・安心』できる食料を安定的に、かつ安価に生産・供給する上で最も関係が深いものは『土』と『水』である」と言う。

日本は食料輸入大国であり、自給率は先進国でも最低水準にある。このことはあらためて言うまでもないだろう。しかし、この大量の食料輸入が、「土」と「水」そして農産物生産に使われる「肥料成分（窒素・リン酸・カリなど）」の大量輸入でもあることは、そう意識されていないのではないか。

松坂さんが紹介されている数字をいくつか引用すると、日本は小麦・大麦・大豆・トウモロコシの4作物、合計2803万トンで、栽培に要する「年間50億立方メートルの水」を輸入していることになる。これは「日本人4000万人の1日の生活用水」にあたる。

また、「アメリカのことばに『穀物1トンを輸出することは土壌2トンを輸出することに相当する』というのがある」が、この言葉は、生産性を過度に重視する、近代的な農業生産がもたらす表土の流出を指している。これを2803万トンの穀物に当てはめると「輸出国の土壌5606万トン」に等しいことになる。

さらに、輸入農産物に含まれる肥料成分はどうか。窒素だけを取り上げてみても1992年時点で「92万トンとなり、国内農家が投入する57万トンを上回る」。農地に還元しきれない窒素成分は、河川や湖沼、地下水や海を汚染する原因となっている。“豊かな食”が、このような数字と結びついていることは覚えておいてもいい。

日本の農業用水需給は現在さほどひっ迫していない。そして農地をみれば不作付地が拡大している。だがそれは、他国の水と土を農産物というかたちで、それこそ天候不順のときには世界の農産物市場に影響を与えるほど輸入しているからであって、そうでなければ（そのようにできないのであれば）、話はずいぶん違ってくるはずである。

ところで、本来当たり前であるべきはずの「食の安全・安心」が、近ごろとりたてて語られる大きな理由に、BSE問題や無登録農薬の散布、産地偽装などといった食料生産および食品加工にまつわるさまざまな不肖事がある。

「このような国家が、何のかんばせあつてか『食料主権』や『水主権』を声高に主張できるものだろうか。川から地下水まで汚染して1リットル200円のペットボトルを愛用して不思議に思わない国民に『水主権』の主張は似合わない。えいえいと育てて搾った牛乳が1リットル198円と比べて、何の感慨もおこさない国民が『水主権』を語るのも似合わない」

日本にとっての水危機は、“豊かな食”の背景にあるさまざまな問題を感じ取ることができない我々の感性にあるのかもしれない。

田口 均

山崎農業研究所会員、編集者

y.noken@taiyo-c.co.jp

松坂正次郎：1925年生まれ。『農業共済新聞』編集長、週刊『農政と共済』編集主幹等を経て、現在、週刊『農政と共済』コラムニスト。著書に『農政の視

点 (PARTI-IV)』、『変革期の農業共済』(ナイア) などがある。

食料主権：「食料主権」という言葉のもつ意味について、山崎農業研究所編『緊急提言 食料主権 暮らしの安全と安心のために』のまえがきでは、「安全で安心な食べものを、自由につくり選択できる国民の権利であり、主権在民である」と述べている。

『21世紀水危機—農からの発想』の内容・構成はこちらから

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/03wadai008.html>

本のご注文は山崎農業研究所へ

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_index.htm](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm)

---

<元気な農業・元気な暮らし・6>いま「食育」で大切なことは？ (上)

---

昔も今も、食に100%の安心はない。リスク(危険性)はつねにある。衣・食・住のなかでも、食のリスクは大きい。

まず、食習慣が病気を引き起こす原因になること。いわゆる生活習慣病。この場合は食べ方の問題。食べ過ぎ、食べなさ過ぎ、栄養のかたより。

食べ物そのものにもリスクはある。食べ物となる食素材は、ほとんどがナマもの、生き物。たとえば、野菜。生き物だから、育つ過程に、リスクがある。病気にかかる、害虫に食われる。それを防ぎ、退治するのにクスリ・農薬を使うことも必要になる。

食べ物は生き物だから、不作の年もある。これも食のリスク。食べ物は環境の産物。環境が悪ければ、食べ物も育たない。ことしは冷夏だったから、クルマの出来が悪い、不作だ、なんてことはない。クルマづくりの工場に不況はあっても不作はない。工業と農業のちがい、いまの子どもたちはその根本をわかっているだろうか。

食べる対象は生き物で、こちら食べる人も生き物。向こうもいのち、こちらもいのち。リスクを最小限にするよう、お互いがどう付き合うか。いのちを育て、いのちをいただいて、いのちが育てられ、養われる。昔、自給自足の時代はいのちといのち、生産と消費が直につながっていた。生き物との付き合い方



の知恵と技がないと、生きていけなかった。

食えるか、食えないか、毒をもつものならどうすれば食えるか。たとえば、わらびでもそのまま食べば毒。上手においしく食べる知恵と技が「食の文化」というもので、これは地域ごとに違う。

「食育」とは、そういうリスクを抱えた生き物と付き合うための、地域に根付いた食の知恵と技、食の文化を伝え育むこと。(いまの食は、あなた任せだから、知恵や技がなくても、飢えることはないけれど、それが「いただきます」の心を失わせている。)

そのためにはどうするか。まずは、食と農の距離を縮めること。いのちを育てる農と、いのちをいただく食との乖離をなくす。そのためには、いのちを育てる農の場を「食する人」に近づけること。(以下次号へ)

(社) 農山漁村文化協会 提携事業センター所長

栗田 庄一

〒107-8668 東京都港区赤坂 7-6-1

TEL.03-3585-1144 FAX.03-3585-6466

<http://www.ruralnet.or.jp/>

[kurita@mail.ruralnet.or.jp](mailto:kurita@mail.ruralnet.or.jp)

---

#### <丹羽敏明の戦争体験> 18、演芸部の誕生の基礎

---

文化厚生部が発足するころ、隊員の中から演芸に対する要望が澎湃として沸き起こってきた。作業隊の首脳部の中にもその必要性を認める論が興り始めていた。その辺の経緯を、演芸部創設に関わった栗田定市(軍曹、ペンネーム:まさみ、群馬県出身、平成13年没)さんが書いた『思い出は星の如くに』という著書から要約抜粋する。

『ある日、突然私の幕舎に北島少佐という人が訪ねて来た。終戦後、階級はないに等しいといっても、まだ陸軍の我々には若干の意識はあった。一軍曹の私のところに少佐が尋ねてくるなど大変なことだ。私はどうして北島少佐が来られたのかわからなくて困却した顔で対した。「私は作業隊本部付の北島少佐だ。実は君に頼みがあって来た。内地帰還の船を待つこの作業隊も色々の都合

でここに待機する期間が長引くらしい。ややもすれば男同志のキャンプなので殺伐に流れがちである。ついては、これら作業隊員の無聊を慰め、苦しい作業の連続の日常に一滴の涼を与えたいと思う。君は演劇の経験があると聞いている。どうだろうか、いま私は演劇をやるために必要な人たちに働きかけて演芸隊を作りたいと思っているのだが、参加してくれないか」。かねてから私も、出来るなら演芸隊を作って、周囲の人たちを慰められたらと思ってはいたが、毎日の激しい重労働を終えた身体に、演芸の稽古などとても不可能に近いことだ。しかし上層部の人たちから声をかけられたことは嬉しかった。かつて戦争中、スマトラのジャングルの中で、戦闘の合間に簡単な脚本を書いて、何回か上演したとき兵隊たちが実に喜んでくれたことを思い出した。衣装もなく、現地人のサロンを借り、支給された手拭いを継ぎあわせて着物を作り、馬の尻毛と木綿糸をまぜてカツラを作り、敷布と毛布を背景にしたお粗末な舞台だった。時には公演中に空襲にあい、その儘の姿で陣についた懐かしい思い出がある。ここには9千人からの人がいる。かつて演芸を経験した人も沢山いるだろう。照明をする電気屋さんも、呉服屋さんも、大工さんも建具屋さんも、また背景装置をする人も音楽家もいることだろう。私も嫌いな道でなし、すぐに参加を申し出たかっかが、現在の作業をやりながら演劇をやるという難しさをどう解決したらよいか、即答は出来かねた。——翌日からキャンプ内に、こんど演芸隊が出来るそうだという噂がひろまって行った。中隊長はじめ隊員のみんなからも「作業の方はなんとでも応援するから是非演芸隊に参加して我々を楽しませてくれ」という励ましの声があった。そこで北島少佐が私の答えを聞きに再度訪れたとき、私は「やってみます」とはっきり答えた。北島少佐をはじめ20名ほどの演芸好きが集まり協議の結果、次のことを申し合わせた。(1)我々の演劇を発表するため出来るだけ立派な舞台を作ること。(2)脚本は1週間に一回程度、常に新しいものを発表する。(3)脚本は募集その他により総意で決める。演出担当が決まったら配役上の不平は決していわないこと。(4)とりあえず、各自現在の中隊に所属して演芸部として発足するが、近い将来英軍の了解を得て演芸中隊として編成する。(5)練習は毎日、各自の作業終了後、当分の間この舞台です。だいたい以上のようなことだったと思う。』

---

<日本たまご事情>男はタマゴを毎日2ヶ食べると心筋梗塞で死なない？

---

先日、毎日新聞の記事に

「女性の死亡率 毎日卵2個以上食べると2倍に」という記事が出ていました。

<http://www.mainichi.co.jp/women/news/200309/09-04.html>

私どもタマゴ屋には、心臓が止まりそうになる悪い記事です。

早速調べてみましたら、この事についていろいろな事がわかってきました。

この記事のもとになった日本心臓学会における滋賀医大上島弘嗣先生の

「鶏卵摂取量と総コレステロール値、総死亡率、心筋梗塞死亡率の関連」の発表要旨及び添付表を見てみますと、その発表主旨は誰が読んでも新聞記事とは異なります。

「女性の死亡率 毎日卵2個以上食べると2倍に」とセンセーショナルなタイトルになっていましたが、これは上島弘嗣先生の発表主旨とは違います。

確かに卵2個以上食べる女性は心筋梗塞死亡率が2倍になっているデータが発表されています、ところが同じ欄に卵2個以上食べる男性は心筋梗塞死亡率ゼロとなっています。

ただしこれらは、いずれも他のデータ数に比べ極端に少なく、結論を出すには充分でないと思われます。

タマゴのマイナスイメージのみを強調した悪意のある記事としか考えられません。えてして新聞はニュースになりそうな事を面白おかしく書くきらいがあります。その逆も真実です。それによって被害を受ける側はたまったものではありません。

同じ学会発表要旨を見て記事を書いているのですから「女性の死亡率 毎日卵2個以上食べると2倍に」なるなら「男はタマゴを毎日2ヶ食べると心筋梗塞で死なない」も事実です。

近々日本養鶏協会のほうで上島弘嗣先生に会いその発表主旨を確かめてみるとの事です。

齋藤 富士雄

(株) 愛鶏園

<http://www.ikn.co.jp/>

川口市でのワークショップは無事に終了しました。  
市民の人達から地域で子供に関わっている存在を  
列挙してもらったところ、「コンビニ」も含めた多様な  
世界が浮き彫りになりました。

次回、今回列挙したリストをもとに  
「子供にとっての地域社会」とは何か整理し、  
その中での「学校」の位置付けを出します。

ここから、「学校」に市民がどう関わるべきかを  
考えていくことになりました。

今回の結果はかなり画期的だと思います。  
従来、「地域と学校を結ぶ」とか「開かれた学校づくり」式の議論と  
不登校やひきこもりなどに関わる議論は必ずしもマッチして  
いませんでした。

前者は、論理的には「学校」の存在をいったん肯定した上で  
ないと成り立たず、後者は「学校」の存在うんぬんよりも  
子供自身が生きのびることを前提に考えるため、  
「統合的」視点での議論になりえていませんでした。

前者は文部科学省系、後者は厚生労働省系と縦割りの序列に  
期せずして市民団体などもはまり込んでしまった場合もあると思います。

「学校」の位置付けを最初に求めると言うことで、「統合的視点」  
での制度改革への論理的道筋が出来ました。

「地動説」的な市民社会構築への貴重な第1歩です。

環境クラブ 増山 博康

<http://www.ecoclub.co.jp>

8月の新規収蔵図書

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/01new.html>

ニュース：書誌データ登録件数が8万を突破しました。

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/sp/200309/news1.html>

話題の図書：訳著者：小林清市

『中国博物学の世界 -- 「南方草木状」「斉民要術」を中心に --』

中国最古の植物誌『南方草木状』の全訳・解題・影印版を含む、気鋭の中国科学史家の遺稿を集大成

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/03wadai012.html>

2002年度貸出ベスト一覧

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/02best30.html>

農文協図書館 IT担当 原田太郎

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/>

---

<編集後記・同人の近況報告> (9月11日～9月24日)

---

本号で原田勉氏がふれている「農産物泥棒」であるが、新聞報道によれば、茨城県内で逮捕された梨泥棒は、「家族に新鮮な果物を送りたい」気持ちから盗みを働いたという。気がかりなのは、不況の影響がついにこのような犯罪につながったということである。この不況も、いつまで続くのか誰にも分からない。農産物は他の製品と異なって防犯対策が困難である。農家にとっては新たな悩みが増えたことになる。(山崎農業研究所・益永八尋)

---

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

---

- 1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
- 2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
- 3、1回1テーマ、10行位に。
- 4、ホームページを持っている人は、文末にURLを。

5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

---

◎投稿アドレス変更のお知らせ

---

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、

[y.noken@taiyo-c.co.jp](mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp)

となっております。投稿される方はこちらのアドレスをお願いします。

次回 119 号の締め切りは 10 月 6 日、発行は 9 日の予定です。

最後まで読んで頂き有り難うございました。今後もよろしくお願い致します。

---

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

---

書名：岩波アクティブ新書 45 『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：本体 700 円＋税 発行日：2002 年 10 月 4 日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

---

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_mailmag.html](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html)

<本誌記事の無断転載を禁じます>

\*\*\*\*\*

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 118 号

バックナンバー・購読申し込み／解除案内

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_mailmag2.html](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html)

2003.09.25（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp>

\*\*\*\*\* ここまで『電子耕』\*\*\*\*\*